

33 カ国リレー通信

<第 20 回>メキシコ

貸自転車と肥満世界—
—生活習慣の見直し進むか—

小里 仁

思い立って、去年の秋から3か月余、メキシコ市で暮らした。彼の地に初めて滞在したのは1982年。あれから約30年になる。とはいえ、この間、サンパウロ特派員時代(87~91年)には大統領選をはじめとする取材で何度か足を運んだし、今世紀に入ってからでも駆け足でメキシコ国内を回ったことがあるので、完全な空白期間が続いたというわけではない。

メキシコは変わったのか?変わっていないのか?多くの人に聞かれた。答えるのは難しい。30年やそこらで根底から変わるような国ではないと思うが、でも外観は少しずつ様変わりしていた。

あのときメキシコは、膨大な累積債務をかかえ、金融危機のただなかにあった。ペソの価値が大幅に下落し、金持ちは「海外旅行ができなくなった」とぼやいていた。概して人々はうつ向き加減で、表情は暗かった。街角の公衆電話は大半が壊れていたが、つながっているのはただで使えたので、運のいい人は大声で尻上がり「ブエノ……」と回線の向こうに叫んでいた。その横を車の排ガスを浴びた通行人が顔にマスクをしたりタオルを巻きつけたりして歩いていた。路上には「セニョール」と通行人に弱々しい声で小銭を求める乳飲み子をかかえた女性がいた。貧富の格差は誰が見ても明らかだった。

いま、1985年の大地震で痛めつけられた市中

心部のオフィス街には超近代的なビルが林立し、高層ビルの建築ラッシュはなお進行中だ。背広姿の会社員たちは携帯電話を耳にあてて往来し、スターバックスなどの明るいカフェテリアではコーヒーをすすりながらパソコンのキーをたたいている。「無線LAN完備」はこの種の店の客寄せには不可欠のようで、同様にホテルもパソコン環境のよさをうたい文句にしている。路上で小銭を求める人々も消えたわけではないが、隣国から吹いてきたグローバリゼーションの風を心地よく受け止めている人たちがあふれている。

このあたり、レフォルマ通りではうれしいことに、バスから撒き散らかされたあの黒煙が随分減っていた。「鳥も棲まぬ世界最悪の大気汚染都市」と酷評された1970~80年代を思えば、空も青く美しくなったものだ。広い歩道のあちこちに駐輪場がつくられていて、後輪部の白い泥除けに緑色で「ECOBICI」とかかかれている、赤いフレームのそろいの自転車が並んでいた。その横、柱のような機械に利用者がカードをかざしては、自転車のロックをはずして乗っていく。書類をカバンに入れたサラリーマン風の男、若い女性などなど。市が2010年2月に始めたレンタサイクル「エコビシ」(Ecobici)のネットワークだ。

知人によると、年会費300ペソ(約25ドル)を払えば、登録証が手に入る。自転車は45分以内の返却なら無料で、300mごとにある別の

駐輪場に返してもよい。超過分は費用がクレジットカードで引き落とされる仕組みだそうだ。アラメダ公園やソカロなど観光名所となっている「中心部歴史地区」周辺に当初、85カ所に計千台の自転車を配置した。市長は、「(500万台を超すといわれる)車の通行量を減らして大気汚染を抑え、公共スペースを広げ、生活の質を向上させる」と導入の動機を語っている。社会的地位と近代化の象徴として根付いた車優先の生活文化。これにくさびを打ち込みエコ社会に改造したいという遠大な計画である。



メキシコ市に登場した貸自転車システム (Ecobici) (筆者撮影)



日曜日には目抜き通りが自転車天国になる。日頃はマナーの悪い車の洪水に苦しむサイクリストに、この時は笑顔があふれる (筆者撮影)

1年間にほぼ目標どおり2万4,000人が登録。貸自転車は毎日延べ平均9,000人が利用、移動距離は8キロ。最近の報道によると、登録者は3万人を超え、数千人が登録待ちだという。市民の評判も上々のようで、市は対象地域を拡大していき年末までに貸自転車を4千台、駐輪場を275カ所に増やす構想だと伝えられる。パリやバルセロナなど先行する自治体はあるが、人口1,000万を超すメガロポリスで自転車を活用したエコ社会の成功モデルを実現したいと意気込む市当局の実験に、自転車愛好者のひとりとして諸手を挙げて声援をおくりたくなる。

ラジオからは連日、「野菜や果物を食べよう」と子どもの歌声が番組の合い間、合い間に流れていた。避妊のキャンペーンと並び最もひんぱんに耳にした政府の公衆衛生分野でのキャンペーンだ。そう、いつの間にか、メキシコは米国を抜いて世界一の肥満国になってしまったのである。経済協力開発機構 (OECD) によると、メキシコ国民の30%は肥満症で、女性は35%と男性よりもその比率が高い。女性の肥満は政府の調査では1988年18.7%、99年21.7%だったから、この10年間の伸びは尋常ではない。死因第1位の糖尿病ははじめ肥満症が引き金になって毎年20万近い国民が死亡するとの統計もあり、政府はマスメディアを通じて、やれダイエットをせよ、運動をせよ、医者に行けと叫んでいる。しかし、多くの国民はまだ深刻に受け止めているふうにはみえない。公衆衛生学の専門家に言わせれば、ファーストフードの食べ過ぎ、コーラのがぶ飲みなど平気の平左の国民に、脂肪・砂糖・塩・炭水化物の摂り過ぎが人体にもたらす危険性をもっと真剣に知らせる努力が政府には足りない。困ったことに国の将来を担う児童・生徒にも過体重、肥満症が蔓延していて、5~11歳の子どもの該当者は450万人にもなる。80~90年代は治安状態が悪く、外で子供

たちが遊べなくなり、家でテレビゲームに興じるようになったことで運動不足に陥ったのが一因だとメディアは報じ、同時に、子どもたちが学内で売られている清涼飲料水やジャンクフードに手を出すのを放任している教育界の自覚の乏しさも槍玉に上げている。

悲しいことに肥満症は、金持ち病ではない。貧しい農村部から職を求めて都会に流出し住民たちを筆頭に、外食が増えて栄養の偏ったファーストフードに頼りがちになった結果でもある。例えば、20 年間でフリホール豆の消費量は半減。14 年間で果物・野菜の消費量は 30%減って、逆に清涼飲料水の消費は 40%伸びた。貧困層に限れば 60%増にもなる。一連の統計データは、

国民の食生活の好ましからざる様変わりを示しているのだろう。栄養学の専門家は「蛋白質に富むフリホール豆やとうもろこしを常食とするメキシコの伝統的な家庭料理はもともと栄養バランスが取れていた。マヤ伝来の古き良き伝統食を見直すべきだ」と訴えている。

環境を重視した生活様式の変革と伝統食への回帰。めざすものは過剰なモータリゼーション、ハンバーガー文化からの脱却である。その意味でも、「貸自転車と肥満」は北の巨人のくびきから自己を解放する宿命を背負ったメキシコの生活習慣の変化を測る興味深い指標ではある。

(こざと ひとし 元朝日新聞記者)

『たちあがる言語・ナワト語 — エルサルバドルにおける言語復興運動』

マリア・カステジャノス、佐野 直子、敦賀 公子 グローバル社会を歩く会発行
新泉社発売 2012 年 3 月 220 頁 1,000 円＋税

名古屋市立大学で社会言語学を専攻していたエルサルバドルからの留学生が、消滅の危機に瀕している少数言語に興味を持ち、故国に一時帰国した際に首都サンサルバドル近郊の町パンチマルコでビビル人の言語であるナワト語の話者がほとんど見当たらなかったことに気付く。いろいろ調査したところ、首都からわずか 50Km しか離れていないイサルコ市でナワト語教育プロジェクトの存在を知り、ナワト語とビビル人について、より深く知りたい、ナワト語の復興活動に貢献したいと願い、日本語（1～149 頁）・スペイン語（151～229 頁）で纏めたのが本書である。

エルサルバドルの紹介、現地調査に至る経緯と概要、エルサルバドルとナワト語衰退の歴史、これまで行われたナワト語に関する調査と復興プロジェクトについて説明し、現地調査の内容を記している。これに 2 編の解説、「植民地時代のナワ系言語 — 多言語社会におけるリンガ・フランカ」（敦賀 慶應義塾大学・法政大学講師）と「生まれたての言語 — 「危機に瀕する言語」とは何か」（佐野 名古屋市立大学大学院准教授）を付している。世界各地で見られる少数言語消滅の危機に、その復活を図る関係者の努力と課題を綴っており、興味深い。

〔桜井 敏浩〕

~~~~~ [ラテンアメリカ図書案内] ~~~~~

## 『フィデル・カストロ自伝 勝利のための戦略 ―キューバ革命の闘い』

フィデル・カストロ・ルス 山岡加奈子、田中高、工藤多香子、富田君子訳 明石書店  
2012 年 9 月 628 頁 4,800 円＋税

1926 年生まれで、バチスタ独裁政権に反乱を起こして 53 年 7 月にサンティアゴ・デ・クーバのモンカダ兵営襲撃に失敗し囚われるが、釈放されてメキシコに亡命し、56 年に小型船でキューバに潜入、シエラ・マエストラ山中でゲリラ活動を開始、ついに 59 年 1 月にバチスタを亡命に迫りやりハバナに入城してキューバ革命を達成するまでを、フィデル・カストロ自身が初めて書いた伝記。

幼少から学生時代と 1958 年当時のキューバの革命闘争の状況をごく簡単に述べた後、シエラ・マエストラにおける多くのゲリラ戦を詳細に記録している。国家の最高権力者の著作ならではの、この間の記録に値する文書、戦闘時の彼我の対陣や移動を示すカラー地図、ゲリラ戦陣の中での姿や当時政府軍が使っていた各種武器の写真が豊富に収録されており、ゲリラ戦時期の極めて貴重な歴史文書になっている。この後をフィデル自身が記述した続編もすでに翻訳作業に入っており、遠からず同じ出版社から刊行されるとのことで、合わせ読めばキューバ革命指導者の口から経緯とその間何を考えていたかがよく判るだろう。

〔桜井 敏浩〕

## 『カストロ家の真実 ―CIA に協力した妹が語るフィデルとラウール』

フアーナ・カストロ マリーア＝アントニエタ・コリンズ インタビュー・構成 伊高浩昭訳  
中央公論新社 2012 年 3 月 491 頁 3,300 円＋税

ガリシア人移民の農園主の 7 人の子の二女として生まれた著者は、二男のフィデルと三男のラウールという、後にキューバ革命を成し遂げその後現在に至るまで国家のトップにいる二人の兄をもつ。フアーナは兄たちの革命運動とゲリラ戦を支援していたが、革命政権がやがて共産主義に偏ったことを嫌い、反体制派支援にまわり、1964 年にキューバを脱出してメキシコに亡命し、65 年からマイアミに在住して反カストロ政権批判を続けるが、70 年まで CIA と接触し支援を受けていたことを本人も認めている。

カストロ家の家族関係や愛憎や、フアーナがなぜ特にフィデルと対立するようになったかを、1999 年にメキシコ人ジャーナリストのコリンズとの膨大なインタビューで語ったが、その時はなぜか出版を拒絶した。奇しくもキューバ革命 50 周年に当たる 2009 年に再びその原稿の修正作業を行い、出版されたのが本書である。

この間の経緯やフアーナの目からみた二人の兄の実像、キューバ革命政権の変容、革命戦争を戦った男達の人となり（例えば、ゲバラは共産主義を持ち込み、工業相として原油開発の可能性を潰してソヴィエト連邦の援助に従属させ、最後は冒険者に戻ってキューバを去ったと酷評している）、なぜ CIA に協力し、その後離反したか、などをあからさまに述べ、最後に最も親しかったラウールに「民主化への脱皮」を呼びかけている。もとよりフアーナの一方的な言い分で描かれた部分が少なくないが、キューバ革命について長年取材してきた訳者の 8 頁にわたる詳細な解説「甦ったキューバ革命の裏面史」があって、本書の内容の背景がよく分かるようになっている。

〔桜井 敏浩〕